



目次 01 歴史文化学科の活動ほか 02 歴らぼ活動ほか

01 歴史文化学科の活動ほか

第 5 回 歴史総合・地理総合研究会開催



2025 年 3 月 22 日（土）、第 5 回歴史総合・地理総合研究会が、3-22 教室で開催されました。今回は、これまで要望の強かった「歴史教育の中高連携」をテーマに掲げました。主報告は田中弘美先生（滝川第二中学校・高等学校）にお願いしました。中高一貫校ならではの歴史教育の実践と、その先進性について理解することができました。コメントは、本学科出身の折野紘一朗先生（兵庫県立須磨友が丘高校）、古賀崇之（倉敷市立味野中学校）のお二方にお願いしました。中高それぞれの現場での成果と課題が率直に報告されました。その後、対面・ズーム合わせて 20 名近い方々に熱心にご議論いただき、大学も含めて歴史教育の連携を深めることの重要性と今後の課題について、認識を新たにしました。（教員・高田 実）

中町ゼミ巡検：奈良マスジド

2025 年 6 月 21 日に訪問した奈良マスジド（Nara Masjid Jan Academy）は、奈良市にある 2019 年設立のモスクで、もともと老人ホームを改装して作られました。1 階が男性用、2 階が女性用に分かれ、それぞれ広い礼拝スペースがあります。取材ではヤセルさんとチョードリーさんが麦茶を振る舞って下さるなど、親切に対応して頂きました。平日は約 15 人、金・土曜日は 100 人程が礼拝に訪れ、信者はパキスタンやバングラデシュなど多国籍です。説教の言語も曜日により異なり、地域交流や学童のような活動も行っています。ムスリムの観光客が訪れることも多く、奈良県唯一のモスクとして頑張っていると感じました。（2 回生・山田啓介）



2024 年度・学芸員課程講演会

2025 年 1 月 25 日、コロナ禍以降中断されていた学芸員課程の講演会が開催されました。講師に辻川敦氏（尼崎市立歴史博物館／認証アーキビスト）をお迎えし、尼崎市の事例に即してアーカイブズ・自治体史編さん・地域史に関するお話をうかがいました。私は日本史研究 I の講義の一環として参加しました。辻川先生は、全国歴史史料保存利用機関連絡協議会の会長や火垂るの墓を歩く会の代表も務めておられます。自分が住んでいる地域の歴史を知ること、現在行われている事業の意味合いも深く感じ取ることができると学びました。そして、地域の歴史を知することは興味深く大切なことだと感じました。（2 回生・前田早紀）

歴らぼ通信では、歴史文化学科における様々な活動を紹介しています。通信に記載される記事の多くは、ホームページ「歴らぼの WEB サイト」（<https://kobe-konan.jp/rekibun/>、右の QR コード）でも紹介していますので、そちらもご覧下さい。ちなみにこのアドレスは最近引越したものです。なお、各記事を書いた学生の年数は記事の時期に合わせています。





今年も卒論発表会が開かれた。2025 年 3 月 4 日、3-22 教室で 7 名が卒論の概要を発表した。学生、教員合わせて 25 名が参加し、熱い議論を交わした。2 年生の私にとって、この発表会への参加は初めてであったが、先輩の発表する卒業論文はどれも興味深く、話を聞いていく中で提起された問題点や結論を考えることができるとも楽しかった。最後に疑問点について質問できる時間が設けられ、私達後輩と 4 回生との間の質疑応答はとても興味深いものであった。これから自身の研究を進めていく中で、困るであろう史料の使い方や調べ方、卒業論文の書き方など、勉強になった点が多く、大変有意義な発表会であったと思う。(3 回生・加島昌昇)

2024 年度卒業論文・福重湖雪（高田ゼミ）：近代日本におけるクリスマスの定着と贈答慣行の変化 —「自発的贈与」の誕生と「義務的贈与」との共存—

本論文は、近代日本におけるクリスマスの定着過程と、それが日本の伝統的な贈答慣行に与えた影響を分析した。明治大正期の『風俗画報』『主婦の友』『読売新聞』『朝日新聞』などの一次資料を分析した結果、1910 年代には都市部でクリスマスが宗教行事ではなく、家庭内の贈答文化として浸透していたことが明らかになった。また、歳暮が「社会的義務」として贈られるのに対し、クリスマスプレゼントは「自由な贈与」として定着した点を、モースの『贈与論』を基に考察した。義務的贈与と自由な贈与は異なる形をとりながらも、どちらも「人と人とのつながり」を深めるといふ本質を共有し、現代においても形を変えながら共存していることを論じた。

「クリスマスプレゼント」（出典）『主婦の友』第 2 巻、12 月号、1918 年、78-79 頁。

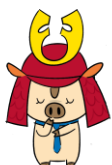


2024 年度卒業論文・仲畑天晴（東谷ゼミ）：最後の三田藩主九鬼隆義の教育構想の形成とその背景 —徳島藩との関係性を中心に—

最後の三田藩主九鬼隆義は藩教育に洋学を取り入れたことで知られる。明治以降も神戸初の貿易商社・志摩三商会の経営に加え、神戸女学院を設立した。本論文では、九鬼隆義が教育に注力した背景として、江戸時代後期、三田藩と徳島藩との間で学者同士の繋がりがあり、教育面でお互いに影響を受けていたことに関し 3 点を指摘した。①両藩とも洋学への理解が深く、同時期に長崎へ藩医を送って学ばせており、徳島藩では 18 世期末に医師学問所が設立されている。②三田藩で藩校造士館が建てられたのは、両藩が婚姻関係を結んだ後であり、親族大名を背景とした学問的な影響があった。③三田藩の洋学者川本幸民の私塾で徳島藩の人物が学んだり、川本が幕府の蕃書調所に出仕した際、同僚に徳島藩の高畠五郎がいるなど、川本を起点とした人的ネットワークがあった。明治以降、阪神間の教育における九鬼隆義の事蹟は、三田藩時代のネットワークとその経験が大きく影響していた。



図 2 第一校舎「南舎」の図（『七一雑報』所載）



上画像 出典：『神戸女学院百年史総説』（1976）

下画像 出典：「三田藩の神戸進出—志摩三商会から白州商店へ」（『島の文化史』（2009））



2025 年 6 月 4 日（水）、基礎演習の高田ゼミは京都の「京ばあむ atelier」と京都国際美術館を訪れました。前者では、実際にバウムクーヘンオープンを使って自分たちでバウムクーヘンを作りました。現在、本ゼミでは川北稔著の『砂糖の世界史』を購読しながら、砂糖を中心に「近代世界システム」の歴史を学ぶという活動を行っています。今回、自分ら菓子作りを体験し、実際に味わうことで、これまでの学びがより現実味を帯びたものになったと確信しています。後者では、「特別展 日本、美のるつぼ -異文化交流の軌跡-」を鑑賞しました。依屋宗達作の《風神雷神図屏風》や葛飾北斎作の「富嶽三十六景」の中でも特に有名な《神奈川沖浪裏》や《凱風快晴》など、誰もが知る日本の文化財に加え、宋・元代の《青磁花瓶》や唐代の《銅三具足》など、朝鮮・中国から伝来した多数の国外文化財も見学しました。

なかでも特に印象に残ったのは、《IHS 紋花入籠目文蒔絵螺鈿書見台》と范道生作・十八羅漢坐像のうち《羅怛羅尊者像》の二点です。前者は聖書を読む際に使用される書見台であり、IHS 紋の周囲には幾何学模様が施されており、その構造にはイスラム圏のコーラン用書見台の要素も見られます。キリスト教だけでなくイスラム教の文化も見受けられる、極めて特徴的な日本の国宝の一つです。後者は、出家前の釈迦の子である羅怛羅が自分の中の仏を見せるため胸を開くという、非常に印象深い作品でした。（1 回生・國久健人）

東谷ゼミ巡検：大阪

2025 年 6 月 22 日（日）、東谷ゼミは大阪市内にてゼミ遠足を実施しました。最初に訪れた造幣局では、明治以降日本の貨幣を製造してきた歴史を学ぶことができ、次に訪れた大阪城では 4 月にオープンした「大阪城 豊臣石垣館」にて豊臣秀吉が築いた石垣を見学しました。午後からは、大阪歴史博物館を訪れ、古代からの大阪の発展を学び、真田丸跡地とも言われてきた三光神社も訪問しました。この三光神社の近くにある真田山陸軍墓地も訪れ、ここでは維持会の会長さんからの説明も実際に聞くことが出来ました。今回のゼミ遠足では古代から現代に至るまでの大阪市の遺跡を巡ることが出来、有意義な時間となりました。（2 回生・森高遥陽）



02 歴らぼ活動ほか

第 19 回歴かふえ：「滋賀県史（近現代編）編纂事業開始と課題点：水利・土木分野を担当して」

2025 年 6 月 25 日、歴らぼ編集部では第 19 回歴かふえを開催しました。今回は講師として古関大樹先生（担当：地理と情報Ⅰ・人文地理ⅠB）をお招きし、「滋賀県史（近現代編）編纂事業開始と課題点：水利・土木分野を担当して」というテーマでお話し頂きました。近現代において、滋賀県で水利・土木事業がどのように行われてきたか、文献史料や地図を用いて分かりやすく解説して頂きました。また、編纂事業の流れやそれに伴う様々な出来事など、貴重なお話も伺えました。調査研究の報告のうえで、如何にして自分の結論に説得力を持たせるか、引用する史料の選択や一本芯を持った物語性が重要だと、今回の話を聞いて感じました。それは今後の研究において非常に参考となる話題でした。（3 回生・脇坂柊吾）



近代資料班：神戸歴史めぐり

私たち近代史料班は、2025年5月11日、神戸各地を巡りました。海外移住と文化の交流センターでは、施設の人のガイドによる詳細な解説により、日本における移民、特に国策移民の歴史を旧移民者支援施設だった建物とともに学びました。次の神戸市立博物館では、神戸の歴史を縄文時代から現代にかけて学びました。開国後の外国人居留地から昭和初期頃の街並みへの移り変わりを模型やタッチパネルによる説明で分かりやすく学べました！神戸海洋博物館・カワサキワールドでは、船舶とモノ作りの歴史を学び、帆船から現代の大型タンカーなどの模型を大量に拝見しました。特に入口近くにある巨大な帆船ロドニー号の模型に圧倒されました。その他、神戸港移民船乗船記念碑、旧海軍操練所跡や神戸港震災メモリアルパークなど、神戸に関する史跡を一日かけて周りました！（1回生・濱田真大）



歴たび班：奈良博『超 国宝』展と志賀直哉旧居・新薬師寺



2025年5月18日、歴旅班は、奈良国立博物館で開催中の『超 国宝』展と、奈良市の志賀直哉旧居と新薬師寺に行きました。『超 国宝』展では、中高の歴史の教科書に載るような有名な国宝などを多数展示し、本では見れない角度から観察できて、多くの気づきや発見がありました。志賀直哉旧居では、近代建築の美しさに加え、旧居周辺の自然の安らぎや静けさを肌で感じ、班一同癒されました。新薬師寺では、薬師如来と十二神将が安置され、十二神将が個々に違う道具や違う格好で薬師如来を囲むよう守り、圧巻の迫力でした。今回は、新1年生の参加もあり計14名で行きました。初めは少し緊張した1年生も、次第に打ち解け、最後は飛鳥鍋をみんなで食べて帰りました。少し暑い日でしたが、楽しく、多くのことが学べた歴史の旅となりました。（3回生・梅本泰生）

近代資料班：平安神宮・琵琶湖疎水記念館・無鄰菴など

歴らぼ・近代資料班は、2025年6月8日、京都の平安神宮、琵琶湖疎水記念館、無鄰菴に行きました。1895年に平安京遷都1100年を記念して創建された平安神宮では、厳かな広々とした境内や大鳥居の迫力に圧倒されました。琵琶湖疎水記念館では、明治時代に京都の発展を支えた水路について、模型や映像資料などで学びました。山形有朋の別邸として知られる無鄰菴は、開放的な池泉回遊式庭園が印象的でした。その洋館では「無鄰菴会議」という日露戦争開戦前の外交方針を話しあった会議の部屋を見学しました。実際に現場を見て、この場の持つ日本近代史における重みが実感され、有意義な時間となりました。（1回生・中田朝陽）



編集後記

パソコンが壊れたので、編集するのに時間がかかっています。面白い記事をあげるので、楽しみにしてください！（村岡）
/ 伊能忠敬の展示&講演会に向けて準備中です。就活はもう少し先になりそうです。（藤本）/ 本号から2回が参加です。1回も入ったので次回から参加となるでしょう。緩やかでも代々続いていくので一安心。（鳴海）

編集：脇坂柊吾（代表・3回生）・藤本茉由（同）・村岡尚登（2回生）・吉松 萌（同）・塩谷 陸（同）・佐々木彬人（同）・鳴海邦匡（教員）

発行：甲南大学文学部歴史文化学科 発行日：2025年11月15日

連絡先：〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1 TEL078-435-2874（学科事務）